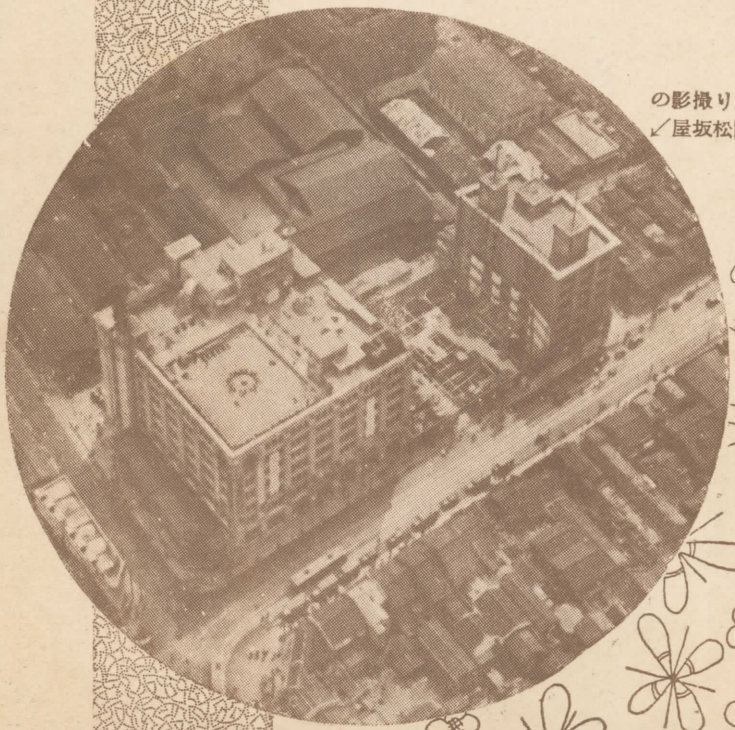
道楽編
國芳
捻り
正札附現金男
國芳画
一勇齋
原吉彫工
宮市亭

〝躍進〟

江湖絶大の御愛顧に浴して、躍進に躍進を續けて參りましたマツサカヤ。
將來更に一層御客樣本位の實を擧げ本來の使命が達成出來ますやう目下日に夜をついで增築工事を急がせて居ります。

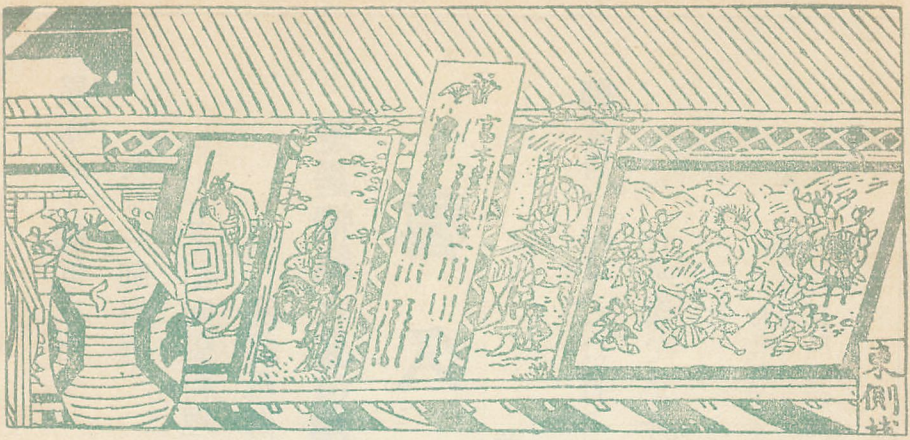
大阪
日本橋

松坂屋



大毎大倉機より撮影の
最近の大阪松坂屋↙

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理
芝居情緒と食道樂
吉久屋食堂
道頓堀戎橋北詰
御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！
支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
京都支店　北新地裏町　木屋町ドングリ橋



◇道頓堀・第十一年・七月號・第百十八輯◇

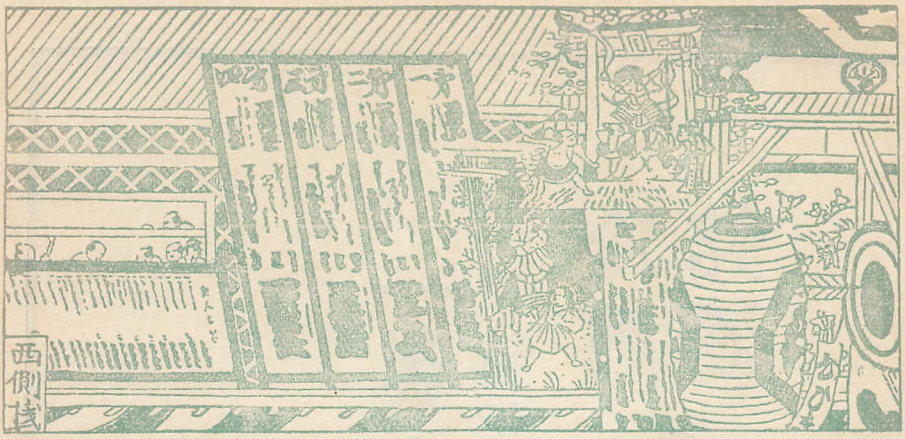
口絵

◇中座・芳子の舞妓雛勇・福助の團七九郎兵衛・吉三郎の一寸徳兵衛・段猿の父速見宗六・三好の母秋野・芳子の娘・吉三郎の船頭平助・三好の女房お咲・錦吾の座頭・菊田の藝者・芳子の雛勇・歌舞伎座・五郎の伯母お幸・「夏の夜話」「幸助餅」舞臺面◇浪花座・五九郎劇の「無敵少年」舞臺面・◇角座・都築の新吉・悔野井のおるい・◇文樂座・「夏祭浪花鑑」舞臺面

◆表紙……團七九郎兵衛
◆扉……福助の團七九郎兵衛

「利根の渡」と「勘平の死」に就て……岡本綺堂（二）
福助と吉三郎への公開狀……高安吸江（四）
葛原庸好（五）
菱田正男（七）
川上利一郎（八）
大澤休象（一〇）

芝居物語
七夕夜話……（一一）
お坊ちゃん……高澤初風（一三）



鏡獅子のことなど……西尾福三郎（一四）
勸進帳「辨慶の型」……編輯部編（一六）
天神祭の所作事に就いて……藤里好古（一九）
上演歌舞伎狂言解題……世話垣鈍文（二〇）
東京へ來た松竹家庭劇……中山楠雄（二二）
十吾一座に就いて……長谷川伸（二四）
おみやげ袋……石河薫（二六）
東京みやげ話……元安豊（二八）
扇雀の進む途……藤原羊平（二九）
東京公演より歸阪して……曾我廼家十吾（三二）

語る人

澁谷天外（三三）
芳子ちゃんのために……七夕夜話私言……鳥江銕也（三四）
上京感銘錄……山上貞一（三七）
試膽會綺談……都築文男（四二）
漫畫……大槻たもつ
カット……山中虹二
編輯後記……大橋孝一郎　村上勝（四四）

冷用
銘酒
白雪

一盞！
清涼湧き陶然たる快味

摂津・伊丹・灘
小西酒造株式會社

中座七月花形歌舞伎

「七夕夜話」　舞妓雛勇　中村芳子

中座「夏祭浪花鑑」

團七九郎兵衛……福助

一寸徳兵衛……吉三郎

キッコーエー醤油
伏見で生れる
天下の銘醸
マルタケ醤油
丸竹
丸竹醤油株式會社

夏は涼しい
日本橋亭へ

例年設備の納涼臺——

青簾に丸行燈と云ふ
古風のひのみの涼みで
御淺酌も一入かと
存ぜられます
是非——

會席
御料理

東地
日本橋亭

電話南(75)一八六一八七

「七夕夜話」

猿　段……六　宗見速　父
好　三……野　秋　母
子　芳……勇　雛（妓舞）　娘

中座　「利根の渡」

郎三	吉……助	平頭	船
好	三……吠	お房	女
吾	錦……頭		座

茶

西区みなとまち

笠井

電話ぶ町二六三三ぶ番

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい

洋酒・飲料水・罐詰

株式會社 横山商店

大阪東區豊後町三

中座　姉藝者雛三……菊田

「七夕夜話」　舞妓雛勇……芳子

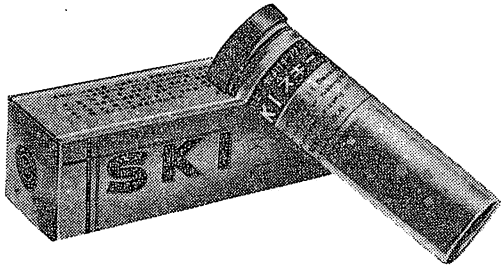
歌舞伎座　五郎劇

「夏の夜話」　伯母お幸……五郎

夏は颯爽と
レートクレームの
お化粧映え!!
レーレクトーレ
東京 平尾賛平商店 大阪

カユミ止
蚊よけ
チック型

SKI スキー



毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫

等嫌ナ毒虫モ**スキー**ノ使用ニ依テ完全ニ驅逐ス

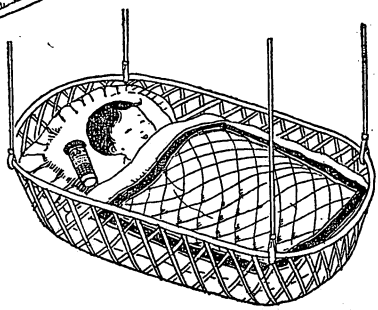
カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ル**カユミ**ヲ即座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨリ佳香ニ富ム且瘙痒部ノ搔傷ニヨリ化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

價四十錢

蚊や南京虫に攻められて

スキーの御蔭で スヤ〳〵と



デパート藥品部・藥店ニ有リ

製造發賣元 光榮商會

大阪市東區伏見町三丁目二七

電話北濱三三一五番
振替大阪三三一一七番

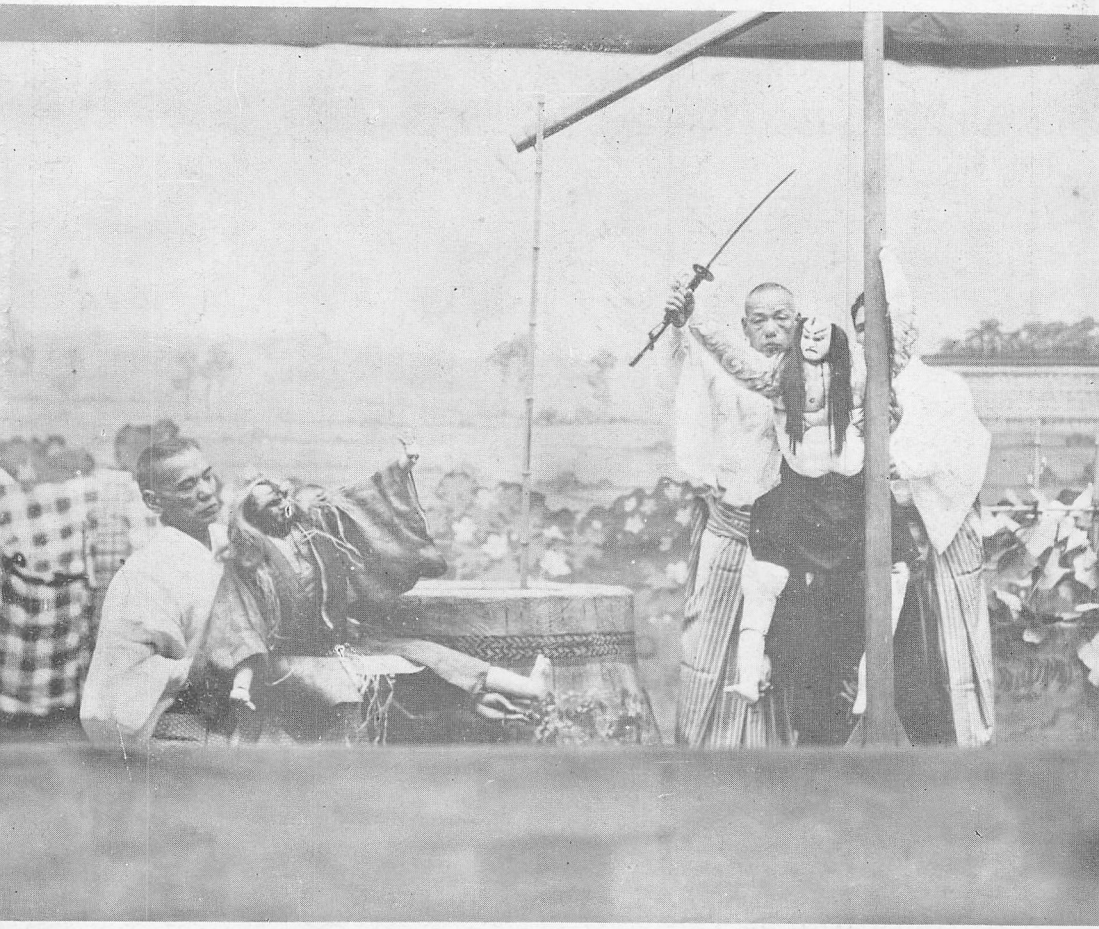
五郎劇「夏の夜話」舞臺面

五郎劇「幸助餅」舞臺面

浪花座　五九郎劇

面臺舞「年少敵舞」

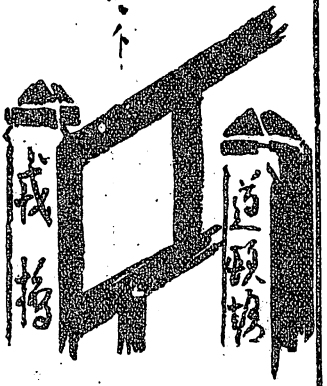
怪談「月割片」新吉……都　築・お　る　い……梅　野　井



文樂座　納涼興行

「夏祭浪花鑑」

鰻
鄙料理
川魚
柴藤



柴藤食堂

二階 椅子席

三階 宴會場

電話南 四八一〇 九五二 四八四四

三十度御避暑気分で

我邸五家迎へ!!

1 **灯ともし頃** ……一場……は水の都の橋の上、闘犬手の夕涼み、輕い袂に輕いお笑ひ、青年左衛門藤綱の昔語りを思ひ出す微笑しい開幕劇に候。

2 **かげ膳** ……二場……は小唄の洩るゝ格子口、そっとのぞけば情人の隆贈据える夏姿、つぶし島田の脳越し、袖とる身にも眞實の命をかけた戀の味、今出來たてのかげ膳に候。

3 **幸助餅** ……三場……は幸助餅と大匙で話も蔓る名代の餅屋賣話の出來をその區に、揭き上げました重ね餅、ほんの前後の色彩に、重ねて再び御目にかけ候。

4 **八家地藏** ……二場……は「この一篇を播州的形に鎭座ます八家地藏尊の靈前に奉ぐ」と云つても決して自分は申し子やない、と原作者楠本木念仁は云ふ。同時に補註と演出を仕る五郎も決して申し子にては無之候。

5 **怪談夏の夜話** ……一場……は軒に風鈴つり愁、打水涼しき竹椽にそつと身に染む怪談も、夫れが嘘やら誠やら判らぬ處が夜話に候。

七日目初日毎日五時開幕

初日は各等割引料金

初日割引値段

櫻・三十五錢	參等・七十錢	貳等・一円
菊・五十五錢		壹等・二円

平常値段

櫻・五十錢	參等・一円	貳等・一円五十錢
菊・八十錢		壹等・三円

前賣開始

壹等席は五日前より・貳等より櫻席は前日より發賣
前賣團体專用電話（戎）二八二六——二八二八

木曜日

◇十二時半開幕◇

1 **三つ巴** 二場
2 **家傳の一針** 三場
3 **土曜日の夕** 一場

マチネー觀劇料

櫻・三十錢	參等・七十錢	貳等・一円八十錢
菊・五十錢		壹等・二円

全館冷房・劇場アルプス

大人歌舞伎座

月刊・演劇研究・雜誌

七月號

第十一年

演藝畫報

第百十八輯

—夏祭浪花鑑—

團七九郎兵衛……中村福助

7月特輯

「利根の渡」と「勘平の死」に就て

岡本綺堂

中座で上演の「利根の渡」は先代勘彌、延若、故人秀調等のために、昭和三年の夏に書きおろしたのであるが、この一座の組合せが出來なかつた爲に延期となり、昭和九年の八月、今の勘彌、我當、村田嘉久子等の一座で、東京劇場初演となつたのである。

その當時、船頭の平助に扮する我當君は、わざ〳〵利根川まで實地研究に出かけて、利根の渡――普通に房州の渡といふ――の老船頭をたづねると、利根はこれほどの大河であるが、昔からこの渡船に限つて一度も顚覆したことの無いのが土地の自慢であると話して聞かされて、我當君少しく恐縮したといふ笑話がある。この芝居では、その渡船が顚覆するのであるから、我當君も返事に困つたであらう

古來顚覆した例の無いといふ渡船をみだりに顚覆させて土地の人々の誇を傷けたのは、まことに申譯のない次第であるが、勿論これは實說ではない。淸の紀曉嵐（乾隆時代の人）の書いた「閱微草堂筆記」の中にこんな話がある。

ひとりの盲人が渡場へ毎日來て、乘降りの客にむかつてこの中に殷桐といふ人はゐないかと尋ねる。その盲人は何者であるか、何のために殷桐といふ人をたづねるのか判らないが、雨の日も風の日も根よく出て來る。さうして幾年を送るうちに、ある日、その渡船から上つた客のなかで、おれが其の殷桐だと名乘る旅人があつた。それを聞くと、盲人は矢庭に彼に飛びかゝつた。他の人々は呆氣に取られて眺めてゐる間もなく、二人は引組んで河へ轉げ落ちた。

人々はいよ〳〵驚いて、兎もかくも二人を引揚げると、彼等は堅く組んだまゝで死んでゐた。盲人の素性も判らず、旅人の身許も知らない。どういふわけで相討になつたのかそれ等の事情も一切わからない。

私はこの話を面白いと思つた。それからヒントを得て思ひついたのが「利根の渡」である。話としては、あとも先もない方が面白いのであるが、芝居としては然うは行かないので、座頭は仇にめぐり逢はずに死ぬことにして、一種の怪談風に作り上げたのである。東劇で上演した時には、座頭が魚の眼を突くところを忌がる觀客も少くなかつたが忌な氣持をさせるやうでなければ此の芝居の効果は擧がらないのであるから致方がない。まあ我慢して觀て下さい。

次は神戸の松竹劇場で上演の「勘平の死」であるが、これは半七捕物帳の一つである。大正十五年の正月、菊五郎君が突然わたしの家へ押掛けて來て、半七捕物帳を是非書いてくれといふ。捕物帳が汎く讀まれてゐるのから思ひ付いたのであらうが、捕物帳は探偵小説であるから、それを劇化するのはむづかしい。現にシャアロック・ホームスなぞが劇化されたのを見ると、興味は遠く原作に及ばない。私はその譯を云つて一旦斷つたのであるが、六代目は例の氣性であるから、ハアさうですかとは引込まない。たうとう私が降參して書くことになつた。

今日では半七捕物帳も約七十種になつてゐるが、その當時でも四十種を越えてゐた。その中から芝居になりさうな物を擇み出したのが「勘平の死」である。これは最初に忠臣蔵の六段目をみせて、その中途から事件が出來するといふヤマがあるので、先づこれを三幕に脚色する事にした。自作を脚色するのであるから、比較的氣樂なわけであるが何分にも探偵劇をかくのは手始めであるので、勝手ちがひで頗る困つた。

それが翌月の新橋演舞場で上演されると、菊五郎君の勘平はもとより本役であり、二役の半七も柄にある役の上に色々の細かい工夫も加はつて好評であつた。俳優も作者もそれに味を占めて、その五月には市村座で「お化師匠」七月には演舞場で「湯屋の二階」その翌年の正月には市村座で「三河萬歳」と、つゞけて半七が舞臺にあらはれる事になつた。木村錦花君も「人形使ひ」を脚色して、先代の勘彌が明治座で上演した。

私は今後も半七捕物帳を劇化するかどうか判らないが、この「勘平の死」は最初の脚色である丈に思ひ出が多い。

福助と吉三郎への公開狀

A 高葛川大
B 安原田上澤
C 吸庸正利休
D 江好男郎象
E

A

高安吸江

來月の中座は吉三郎に福助など少壯の人々のみで演ると云ふ話ですが、それは何より結構なことゝ思ひます。昨年以來關西俳優の總動員はもとより、種々のコンビで試演せられましたが、ほんとうの若手ばかりが道頓堀で本興行をするといふことはまだ無かつたやうです。

先頃畫間特選興行といふのがありましたが、それを本格的なものとは誰しも考へますまい。吉三郎は去年忠臣藏や四ツ谷怪談で大分活躍しましたが、それは右團次といふ元老――では少し氣の毒かも知れぬが、とにかくその高嶋家を統帥としての公演でした。

福助は近年古典座で頻に歌舞伎劇の主役を勤め、現に今度出ると聞いた夏祭の團七でも、いつか北の演舞場で試演ずみです。しかしそれは云はゞ研究成績の豫報であつて、近親の人から「うちの坊々よう演りやはる」との讃辭を得る。あの舞淩に似てゐる、つまり堂々と自信ある作品を發表して公評を乞ふといふ程度ではなかつたのです。

しかし今回はそれ等と違て場所は天下の道頓堀です。特に先輩とも云ふべ

き人が上に立つてゐる譯でもなく、所謂群雄割據の狀態ですから誰に遠慮する必要がありますか、こゝで己が蘊蓄を傾け盡して平素の鬱憤を晴らさねばまた何時頃こうした時機が來ませうか今度若しその成績が香ばしからぬやうでもあらば、或は關西若手全體の信用に關るかも知れません。私は此人々が此好機會をどういふ風に捉へ得るかといふ點に多大の興味を感じ、一面大に期待する處があるのです。

福助は溫厚で悠揚とした處があります。それは關西俳優中名門の一ツといふべき高砂家の三代目で、しかも今日上方歌舞伎の重鎭である梅玉を父に持つといふ惠まれた位置にある彼として上品でボンチ氣分の拔けきらぬは當然の結果と考へられますが、それと同時に彼がいつも神經過敏で落ちつかず、何となしに不安であるやに見受けられる事があるのは、其順調な環境と思ひ比べて聊か矛盾してゐるやうです。

或はそれが配役に關する不滿か、又は我が技能に對する不安か、或はまた他に原因があるかも知れぬが、何れにしても彼がそれを自覺するや否は別として、現代若者に共通する懊惱を心の奥深くに藏つてゐるのは確らしく思はれます。それで斯うした點を握んで彼の爲に新作乃至は再檢討の古典劇方面への進路を拓いてやるのが彼を生かす所以でありませう。

吉三郎の神經過敏なのは、彼が舞臺へ出る途中、地に捨てられた煙草の吸殼を見てさへ、スッカリ感興を打消されると云ふ、彼自身の告白によつても明かですが、元來活動的な彼は近頃殊に出演慾が旺盛となつたらしく、此六月でも長三郎の休演で其代役を殆ど全部引受けて、神經なんか何處へ飛で行つたかのやうに、いかにも愉快げに活躍してゐました。

實際彼のもつあの端麗な風姿と働き盛りのその年配で、文字通りの活動によつて己が技能の熟達を計らねばウソです。無論「惡」の字が附くのは困るが、とにかく死物狂で奮鬪さへすれば多少とも殘つてゐる青年期の生硬さから脫殼して、新時代の一員たる立派な位置を確實に得ることが出來ます。

それは併し敢て吉三郎に限らず、福助其他の若手でも皆同樣で、要は眞劍に鍛へられた力如何の問題です。其力を示すには今度の中座などが一番適當で、そうした努力が何處まで認め得られるかゞ、また我々の最も興味深く覺える點であります。

B　葛原庸好

鴈治郎逝いて一年有半が早くも過ぎ

去つた今日、其當初に於いて劇通乃至は芝居好者の間に喚起された關西歌舞伎今後の動向何何？　の囂々たる輿論が積極的、消極的に果してどれ丈當を得たものとして其成果を見せつゝあるかは、まこと上方芝居を愛する者にとつて鴈治郎が偉大であればある程そのギャップを如何に征服して呉れるかの不安でもあり且又反面的に興味ある問題でもある。今尚鴈殁後にも勝る上方芝居への論議が逐日擴大しつゝある事は事實だ。その良否はともかくとして私一個人の偏見かも知れぬが關西歌舞伎も現在或一つの進路に向つて動きつつある事は推察されると思ふ。一年有半は關西歌舞伎にとつて確かに苦悶の連續であつた。東京方の關西進出は沈滯を叫ばれる上方芝居への多分の刺激劑として役立つたかも知れぬが、他方地元フアンの次第に東京役者への禮讃に傾きつゝある事を極度に恐れなければならなかつた。求めんとして求め難い關西歌舞伎如何に進むべきかの對策摑まんとして摑み難い俳優自身の活路一年有半は實に身心の焦燒、縷骨の連鎖でもあつた。當然の事とは言へ梅、魁、延一丸となつての奮闘は今日ともかく暫定的落付を見せて來た樣ではある。だがそれが決して放心の無我にも等しきものであつてはならない事は勿論だ、第二、第三の飛躍前に於ける待機の姿勢であつて欲しい。

梅、魁、延への期待は現在迄既に凡ゆる人に依て數萬言費されてゐる。此等大成圈内に入りつゝある人々はさておき最も今後に嘱望されるべき新人若手連中は一體何をしてゐるか、我々は寧ろ彼等にこそ最も嚴正忠實であるべきだと思ふ。東京若手連中の恰も群雄に比し、餘りにも小雄を喞つ上方、がそれも悲觀する必要はない。むしろ少數の精鋭にしかず。現在最も注視される若手に福助、吉三郎を擧げる。昨年六月、父福助が三代目梅玉の名跡を繼ぐや同時に五代目福助を襲名した政次郎彼に負はされた未來は現在の關西歌舞伎に徴して幾多の波瀾を豫想させる。併し乍ら襲名後一ケ年、日尚淺しとは言へ彼の眞摯なる努力は目醒しいものがある。鋭才を發揮すべくその第一歩を祝福された彼が自己の藝境への一新紀元を劃すべく延いては先代福助の名を恥しめずとの熾烈な意圖のもとに研究團體少き關西に敢然として古典座を引具する彼の熱と努力は軈て全關西歌舞伎若手の協力一致せる大勢力となる事だらう。荒削りではあるが彼は有餘る舞臺度胸と巧者さで精力的なむしろ奔放でさへある演技を見せる。時として年に似合はず柄を大きく見せる事は

偉とするが之が獨善的に墮する危險あるを憂ふ。

古典座に技を磨く彼の趣旨が小山の大將然たる事にもとより在る筈はなからうが自らの技に陷入らざる樣自戒を奬めると共に我々の期待を裏切る結果に終らざる樣祈つて止まない。七月の花形歌舞伎で彼の團七、利根の渡の若黨を刮目しよう。良きワキ役として、相當の年月を焦らず撓ゆまず努力してゐるのが吉三郎だ。福助が荒削の天才型であるに比し吉三郎は一歩一〳〵と歩みを續ける努力型だと思ふ。線の太い福助に比し線の細い彼、それでゐてよく巧緻と豪放さをも演じ得る彼、立役に得意な福助に對し吉三郎の女形には上方情緒特有の美を認める。同時に彼の藝質から言つて綺堂物は最も柄に嵌るものではあるまいか。その意味で七月中座の利根の渡を次に夏祭を期待する。福助とは全く對蹠的藝境に生きる吉三郎が福助を助けて扇雀、長三郎等と呼應しつゝ次の關西歌舞伎を名實共に背負ふ時、少數の精鋭として最もその眞價を發揮すべく、且東京方を懼れしむるものである事を信じて疑はない

C

菱田正男

吉三郎も、福助も共に關西歌舞伎の中堅俳優として元老の延若、梅玉、魁車、壽三郎らに次ぐ前途に多くの期待をかけるべき優達である。

だが、この二人とも最近は大して振はない。殊に福助はさうである。もつともこの優を煩はすやうな役廻りの狂言も出ないためでもあるが、「古典座」によつてのみ氣を吐くやうではいささか心細い。あの格幅と藝風をもちながら、そのまゝ腐つてしまつては惜しいものだと思ふ。

多くは女形とはいへ立派な父である梅玉丈を持つた福助は、劇界でも幸福兒といはねばならぬ。この良父の下に一向光らぬのは果して誰の罪か？

「古典座」組織以來、幾度かの上演にいろんな大物を手がけて來た「熊谷」「日本駄右衛門」「松王丸」「仁木彈正」から「女殺油地獄」などと時代物、世話狂言片ツ端から征服し、扇、鴈之助市昇らに交つて座頭然として演つて來た役だけに、政治郎から改名と同時に古典座の座頭以上の光りを關西劇壇に放つてくれるであらうことを心ひそかに思つてゐたのは、われ〳〵ばかりではなからう。それが襲名この方、一向振はぬのは丈のためにも、關西劇壇のためにも淋しいことだ。

同じ大阪の若手である扇雀、成太郎

らが、我當、勘彌らの東京の若手連と取つ組んで善戰健闘してゐるこの頃だけに一層氣を揉む「古典座」のみを守つて大將然としてゐては仕方がないと思ふ。この際猛省、緊褌一番華々しい活躍をしてほしいものだ。仕打側も大いにこの際彼のよき指導者となつてやつてもらひたい。

誰かが福助を「未完成品中の未完成品だといひ、あの柄と藝風から推して將來の大成が期待出來るし、ウンと伸びはせぬかと思ふ」…といふ意味が書いてあつたやうだ。これなども福助を評した一寸面白い言葉だ。

◇　◇　◇

吉三郎も今日の地盤を築いたとはいへ、まだ〳〵活動の餘地がある。最近は割合活動し得る役が廻つて來てゐるだけ、この際大いに自重してもらひたい。

今春神戸振出しの巡業での壽三郎の「人斬以藏」の代役といひ、去月大阪中座での長三郎に代る「樽屋久八」に「繁山榮之亟」の二代役などなか〳〵人の代役まで背負ひ込んで遮二無二頑張つてゐるのはいゝことだ。だがその調子の波に乘つてヘンに老ひぼれじみてほしくない。小唄大會に口上を述べるのも趣味だから決してわるいとはいはないし、名優氣取りの茶目話も決していけないといふのではないがヘンに氣取ることは致命傷だと思ふ。とかく世間の蔭口はうるさいものだ。小姑の批難が多い劇壇だ。折角言行を慎しんで、ひたすら藝道へ精進すべきではないか。

中座での「盧原多助」の樽久でも「籠釣瓶花街醉醒」の繁山榮之亟でも共に「長三郎よりよからう」といふ評判だつた。殊に「樽久」はいささか騷々しいといへばいへるが、長三郎に勝るとも劣らない味が出てゐたと思ふし、榮之亟もスツキリしてゐたし、この人の當り役に數へてもよからうといふ感じがした。曾ての小太夫、扇雀らの一座での彼、右團次、霞仙らと組んだ時の彼、相當の大役をこなして來てゐるだけに大歌舞伎の中へほり出されても存外活躍出來る優だ。器用と達者に任せてわるくならないやうに、この人の伸びてゆくのを衷心から祈つてゐる。

D　川上利一郎

若手が漸次鋭鋒を表はし、次の時代の覇者を目指しての躍進は現在の歌舞伎界に見る特殊な現象である。近年相次いで名優を失ひ或ひは巨星の老朽を見つゝある近頃の我が歌舞伎は、極少

數の巨頭連に依つて其の魅力が保たれてゐると云へる。此れが爲若手を拔擢して此れに修練の機會を與へ、來る可き將來に備へる基礎工作とする必要が認識されたのに依るとは云へ、既に東京では我當勘彌等が此れ等若手歌舞伎の公演を重ねる都度相當の反響を呼び技藝も際立つて上達し、早くも輝かしい將來性を持つものとの折紙をつけられてゐる。然るに關西では現在我當一座に參加してゐる扇雀が亡父讓りの藝で定評がある位のもので多士濟々の東京勢と比較して關西若手俳優の餘りに寥々たる有樣に愕くのみである。此れ等の原因としては劇場の不足に禍されてか、關西若手俳優が伸び得る機會に惠まれなかつたのに據るものと云ふ事が出來ると思ふ。勿論二度ばかり中座に於て修練劇が上演された事はあつたが、何等の收獲をも齎らさない內に中絕されたのは遺憾であつた。前置きが大變長くなつたが今回遲蒔乍らも七月の中座に於て、吉三郎福助を中心とした關西若手連に此の機會が與へられたのは實に有意義であり、誠に喜ばしい事である。これは決して涼み芝居程度のものであつてはならない。此の絕好の機會を逸せず若人の燃え盛る熱と意氣に精魂を傾けた覇氣のある舞臺を展開すべきである。吉三郎は當之助時代より藝熱心で聞こえた優であり、藝域も極めて廣く近年益々腕を上げ大歌舞伎に於ても良き助演者として其の手堅さは相當認められてゐる。只いつも手一杯と云ふ感じで潤ひのない嫌はないでもないが、脊丈もあり均衡のとれた姿態の良さは、今後の精進に依つて益々精彩を放つであらう。今年確か四十三才で若手と呼ぶには相應しくない氣がせぬではない程の中堅俳優ではあるが、これからが働き盛り、今後の活躍は大いに注目すべきものであらう。一方福助は現在迄の處、彼の演技に取立てゝ見る可きものが無く、鈍重な感じで鋭さは見られないが、あの堂々たる恰幅と、こせつかぬ舞臺は、あの音調の良い科白と相俟つて將來の大成を確信させる。此の優の舞臺を見る度に大器晩成を思ふのであるが、今度の中座邊りから、そろ〳〵其の片鱗を覗かせても良い頃ではなからうか。今度の上演狂言に選ばれた「夏祭浪花鑑」が純上方狂言であり、一度古典座に於て手がけられたものだけに其の成果は刮目に價するものがあらう。古典劇又尊重すべきものであるとは云へ、一面野心的な新脚本を採り上げ舊套を脫する心掛けを忘れてはならない。此の點今回の狂言の配列は稍清新味に乏しい怨がある樣に思はれる。尙興行價値はど

うあらうと、是非共此の一座の公演を永續して貰ひたいものである。現在の福助が未成品であると云ふ理由で吉三郎が參加したものとすれば、將來は福助を中心に其の陣容を整備して文字通りの若手のみで潑溂たる舞臺を見たいものである。現在萎微沈滯の關西歌舞伎は到底現在の巨頭に依つて更生されるものでない事が立證された今日、其の浮沈の鍵を握るものは、今後の吉三郎福助等であると云つても不當ではないであらう。兎もあれ此等若手俳優の前途は暗澹たる茨の道であらうとも鬪志滿々、明日の關西歌舞伎の爲に、突進的な氣魄を以て不斷の精進を怠らず吾人の期待を裏切らない樣にして貰ひたいものである。

……

E 大澤休象

福助は、無技巧に近いほど、おほまかな藝である。戰國時代の武人で云へば、織田信長の青年の頃、齋藤道三の稻葉山の城へ招かれて行つた。あの時の武骨さが髣髴される。烈々たる夏の日の空に聳ゆる雲を想ふ。漠々たる其の裡に、牛を溺らし、兎を流す丈けの豪雨と、千年の杉檜の巨幹をも劈くべき疾雷とを藏してゐる。梅が香に櫻の色を持たせ、柳の枝に咲かせるてふ嫋やかさは無いが、渟々として軀て天を摩する松柏の鬱蒼たる趣がある。併し玉ならばいまだ磨かざる璞だ。光燿たる輝きを發するには不斷の修養と工夫が要る。之れから一つ纖細に過ぎるほどの神經を使つて欲しい。

飜つて吉三郎を眺めると、是は又滅法に艶があつて、二枚目は云ふに及ばず、輕快な三枚目でも、或は年增女の色氣に至つては將に大阪歌舞伎の隨一であらう。殊に品格の良さ、東京俳優に無い柔か味が含まれてゐる。

七月の中座に、「夏祭浪花鑑」といふ大阪情緒のゆたかな狂言が出て、福助の、團七九部兵衛、吉三郎の、德兵衛義平次と聞き、僕はいつになく心が躍つた。

これから初日を觀に行くので、批評の筆を執りたいが、近頃急の原稿に追はれてゐるので、果して書けるか思束ない。

「利根の渡」の船頭と若黨をいかに仕生かすか、あゝ二丁がきこえるやうだ。

芝居物語

中座上演

七夕夜話

鳥江銕也作

明治維新の變革は總てのものを大きく搖り動かした。堀江和光寺に程近い御池通りの裏店に病を養ふ速見宗六もその大きな波に動かされた、會津武士の成れの果てゞ、元治元年七月の蛤御門の戰ひには禁裡御警衛の小隊長であつたが、戰ひ半ば敵彈を脚を受け、その時の負傷以來落魄の日を過ごしてゐる。暗いともすれば沈み勝ちな宗六の心を勵ますのは妻の秋野であり、道具等も賃り拂つて細々暮してゆく、速見夫婦にとつて唯一つの慰めは二年前新町の扇屋へ預けた娘お千世の成長であつた。

娘十六——可憐にも美しいお千世、現在は舞妓雛勇として廓でも評判であつた。

銀杏の樹に蟬がなく午下、九軒の伊丹屋の女將おかめと姉藝者雛三が、速見の侘住居を訪れて來たのは他ならぬ雛勇のことであつた

舞妓から一本の藝者になる襟替え——その旦那を世話しやうといふのである。おぼこ娘が氣に入つて末永ふ面倒を見、宗六が異人の病院には入る費用まで出さうといふのは當世風の商賣としてゐる唐物商の森本清兵衛である。襟替の話など夢にも知らぬ雛勇は笹をもつて、伊丹屋の伴新二郎と連れて立つて父を見舞に歸つて來た。その美しい娘の姿を見て早や涙ぐむのは宗六夫婦だつた。

新町の伊丹屋——それから數日後の七夕の夜。扇屋の男衆繁吉が澤山祝儀を賴みますと雛勇の着換へを取りに行く。

醉拂つた義太夫の藝者小廣がこれを小耳にして、清兵衛のことを散々罵り、新二郎と雛勇が戀仲だと意外なことを云ふのだつた。

事實——新二郎と雛勇との間には純眞な戀が育ぐまれてゐた。已に彼等は固い約束までも取交してゐる。それだのに金の威光で清兵衛に買はれてゆく雛勇のことを考へれば新二郎は憤らずにはゐられなかつた。それにも增して哀しさに胸が一杯になる雛勇は憐れにも詫びる。

「勘忍しとくなはれ、わて新二郎さんとの約束、決して反古にしたい事おまへん、此處のお母ちやんさへ許してくれはるのやつたら新二郎さんのお嫁さんに貰ふて欲しおます、そやけど……わてが、お金をこしらへなんだら、いつまでもお父さんやお母ちやんに苦勞をかけ、わてさへ辛抱したら親を安樂にさす事が出來ると姉さんに云はれました」

咽び泣く雛勇——だが、この二人の語らひも、雛三がお茶屋の者が舞妓の身體に傷つけたら廓中の笑い者だと强く引裂いてしまふ……。

泣い泣いても諦らめられぬ戀、相愛の新二郎と雛勇の往くべき途は……。絃歌さんざめく廓の家々の七夕の笹は、微風にゆらめき、夜空には織姫牽牛がまたゝいてゐる……。

菊五郎小論

お坊ちゃん!!

高澤初風

世間では六代目菊五郎の事をよく劇壇の嬌兒と呼んでゐる。成程彼は五十の歳を越へても、何處かにまだお坊つちやん育ちの駄々がある。けれどもその多くは、藝に對し、自信に對する、一つの強い信念に出發してゐる。芝居が決まつて初日の開く前には、衣裳鬘をつけて本式に舞臺稽古をやつて見るのが、最近の常例になつてゐる。菊五郎はそれをヒドク嫌つたものだ『廿五日の芝居を廿六日やるのはあつしや困る』と云ふのである。もつと詳しく云へば『さうまでしなければ芝居が出來ない役者とは違ふ』と云ふのである。彼はそれ程に自信が強い。即ちそれだけ世間からは駄々ツ兒に見えるのである

◇

が併しさう云ふ彼が新作物などになると、自ら進んで舞臺稽古をやつて見る。さうして大道具の改作、出語り場所の變更は云ふまでもなく、自分の工夫した型なども幾度か替へて見るなど、その熱心さには驚かされる事がある。初日が開き、二日目となり、三日目となつても、彼は屢々型や運びや舞臺裝置まで替へて見る事がある。菊五郎の芝居の面白さ、その緊張味は此初日から凡そ五日間位の處にある。どう云ふ狂言が出やうとも、彼の心行くまでの工夫と研究は、此間にあるのだから面白味も又其處にある。が一度びこれでよいとなると、そろ〳〵緊張味が欠けて來るのは、その反動とも云ふべきで殊に理解のない大向ふの掛聲や、評判などを耳にすると忽ち腐つて了ふのが常である。

◇

吉菊合同劇などで一番目の時代物に、彼が付合役として出た場合には、世間では『舞臺を投げるので困る』とよく云ふ。がそれは投げるのではない。自分には一向に氣の進まない役をやらされてゐる苦痛か自然と現れるのである。畫家だつて山水を得意とする南畫家に、美人畫を注文したとて、いゝ作が出來る譯がな

い。だから彼が此附合ひの厭な役をやつたあとで、得意の舞踊物などを出したとすると、まるで別人の如くになる。彼が急に生き返つたやうな氣がするのであらう。『保名』『文屋』『鏡獅子』から『棒しばり』『太刀盜人』の類に至るまで、實際技神に入るのだが是に對しても世間の一部からは『菊五郎の舞踊は旨いものだが、どうだ俺は旨からうと云つた氣持ちが見えるのが嫌だ』とよく云ふ。けれども何と云つても彼は旨いのだから段々見てゐるうちに、その悪口を並べた見物も遂に降參する事になるのが常である。

◇

彼の舞踊と三津五郎の舞踊とを對比する時に、一方は形の上に、一方は氣分の上に、變つた方向を進めてゐる事がよく判る。此行き方はその最も得意とする生世話狂言の纖細な寫實から及ぼされてゐる事を、誰れも知るに違ひないが、近頃は兎も角、茲には此纖細な寫實味は、關西の見物には一向に受けなかつたものだ。だからその頃の彼は關西興行をヒドク嫌つたのであるが、今では見物の方が進んでゐる。殊に彼の舞踊に對する憧憬は相當に強い。茲に彼の關西方面巡業の自信も、又強くなつて來た譯である。何か新しいものをやつて見たいと云ふ觀念は、彼にも相當強いのであるが、餘程脚本が氣に入らなければ手を出さない。今から二昔も前だが、彼が帝劇で故小山内薫氏の『綠の朝』を出して、散々の不評に憤慨し、『新聞の劇評家などに何が判るものか』と云つたのが問題となり、東京全部の新聞劇評家から、菊五郎不觀同盟を作られやうとして、危く納まつた事があるが、その事件なども彼の所謂嬌兒の名をなす所以である一方に、又自己の技藝に對する深い自信に外ならない。

◇

今日から考へれば『綠の朝』の如きは、新しい劇として見物の辛抱出來ない狂言では決してない。が當時にして見ると、會話澤山の動きのない芝居——而もそれが盛夏八月の暑い〳〵帝劇で演ぜられたのであるから、見物が辛抱出來なかつたのであるが、それを今から二十年も前に彼がやつてゐたとすると、一歩も二歩も時代に先んじてゐた事が知れる。その頃から今日に至つても、彼の覇氣は少しも變りがない。而もその技藝は益々圓熟の境に入つて、油が乘り切つてゐる。嬌兒と呼ばれやうが、何と云はれやうが、劇壇の覇權を近く一手に握つて了ふのは、彼である事を思ふと、一寸愉快でもある。

東京大歌舞伎

神戸　松竹劇場

鏡獅子のことなど

西尾福三郎

菊五郎が去る四月東京歌舞伎座で鏡獅子を演じたのを最後に、今後は二度と再びこの踊りを公開の舞臺には上演しないと云ふニュースが突然傳はつて六代目ファンを不安がらせてゐる。

その理由とする所はかうだ

或日の舞臺で前シテの彌生が二つ扇を合せて指を心棒にクル〳〵廻す所で何うした譯か一方の扇が意の如く廻らなかつた。それを近くで見てゐた一婦人客が不謹愼にもクスリと笑つたのが菊五郎の肝にカツときた。續いて〳〵花の波……の所で右手の扇を左手で受止める條りで又やり損つた續く失敗に氣を腐らせつゝ後シテになつて幕ぎれの一本足の立身の見得がうまく行かなかつた。

こんな事ですつかり厭氣がさしてきたのか、自己の肉體の頽齡を慨きつゝ鏡獅子はもう御免だよとアツサリ兜を脱いでしまつたと云ふ話であるいかにも菊五郎らしい面目の躍動してゐる話であるが、然しさう簡單に片附けてしまはれては見物が承知できまい。藝の出來不出來はその日の氣分次第で、殊に菊五郎の芝居にはさうした氣持の現れが目立つて著しい所がある。五十才過ぎと云へばこれから先が役者としては眞の働き時だ。殊に先考追慕の記念興行とて過大な役を背負ひ込んだ體の疲れもあつたらう。それを一圖に年齢のせいにして、我人共に許したこの名演技を今後永久に葬つてしまふのはちと早計だらう。峻嚴苟しもしないと云つた名匠氣質もさる事乍ら、あんまりな氣短かを起さずに、そこを一番おつ堪えろと曾我五郎ならぬ菊五郎に朝比奈に代つて申上げたい所だ。

とは云ふものゝ普通の芝居に較べて踊りは何層倍か骨の折れる仕事である。その骨の折れる踊りの世界で幾つとなく人に勝れた名演技を示す一方、家傳の世話物畑に於ても獨自の藝風を持つこの人は、更らに丸本物の新しい解釋に

又新作物の表現に、加役澤山のこの頃の活動狀態を見るにつけ、その旺盛なる活躍に驚嘆する一方、その生命力の濫費に近い迄の膨脹にひそかなる杞憂を抱くのは啻に筆者許りではないだらう。

ともかくも菊五郎が働き過ぎてゐる事は確かだ。働かないでは居られない理由は理由としておいて、今少し靜かに休養の時を持たせたい。

藝の範圍の廣い人だから演し物に困る心配はないとは云ふものゝ、近頃のやうにのべつに働きづめでは自然繰り返し物が多くなりそれが多少鼻につく厭がないでもない。

今が人氣の出盛りだから、何度きても飽きられるやうな心配はないかも知らぬが、あの無人な座組で來る度に相當な成績を收めて歸る爲には菊五郎一人の肩に何れだけ有形無形の負擔が强ひられてゐるか分らないであらう事を思ふにつけ、それが菊五郎の將來に及ぼす影響を危惧するの餘り、私は敢て時稀の休養を奬めたいのである。

藝に生き藝に死ぬる覺悟で花々しく働きづめた揚句、舞臺で討死するやうな氣慨はいかにも菊五郎らしい意氣込があつて嬉しいが、御自分の體のやうにさう太く短かい主義では見物は困るのだ。見物はこの稀にみる近世の名人藝を少しでも長く娛しみ愛して行きたいと思へばこそ、無理をするな、休養させたいと願つてゐるのである。

鏡獅子藏入りの話から飛んだ菊五郎論になつてしまつたが、ともかくも近來餘りに働き過る菊五郎の健康を案じるの餘り、この際今少しく自己の力をセーヴして自重する事を奬めたいと思ふ。

)(……

「道頓堀」年極め
御講讀をお奬め
致します。
一ケ年 三圓三十錢
申込は 編輯部へ

型の研究——その二

勧進帳「辨慶の型」

——その三——

編輯部編

『笈に目をかけ給ふは……

……コリヤ』

〳〵かたがたは何故に……

……かほど賤しき強力を太刀かたなを抜き給ふは……

……目たれ顔の振舞……

……臆病の通りかと……

四天王刀に手を懸けるを

辨慶トンと金剛杖を止める心で突く

四天王に早まるなと云ふ思ひ入れで

突いた杖を自分の體に寄せ、珠數の左の手が少し前へ出る形、

富樫へ首だけ向けて

首を左右に振る

四天王再び意氣込むを辨慶足を

……皆山伏は打ア抜きかけ……

……いかなる天魔鬼神も……

掛聲

『ヨオイ』

開いて四天王に脊を向け、金剛杖を横に伸して押へ留める形で二三度體ごと右へ押す形で焦せるなといふ思入れ

富樫をジロリと見る

杖を兩手に取り、腰のあたりに一文字にして構へ、富樫と向き合ひ

此の掛聲で束となり富樫が右へ寄るので遮る心で杖を右へ一ツ

氣合
『フム』

……恐れつべうぞ見えにける

『……但しこれにて打殺し申さんや』

『コハ先達の荒けなし』

『打殺し見せ申さん』

『……とくとく誘ひ通られよ』

『……以後は屹度……

延ばして二三歩その方へ寄り、今度は富樫が左へ寄るので又左へ杖を延ばして二三歩その方へ寄り、もとへ返つて束に立ち、富樫がなほも押して來るので、右左と三歩大きく後へ輪を書く様にして下り、又束に立ち氣合を入れて早足で、富樫を上手へ押して行き舞臺中央で右の手で杖をトンと突き、左の手で珠數を下げて握つた形になり、顏だけ富樫の方へ向けた見得で極る

以前の形で義經を再び打たんとする

杖を下し、富樫を見る

再び振上げるが目は富樫の様子を覗ふ心

辨慶息を呑み込み杖を下す

杖をトンと突き

……愼みをらう』

〳〵士卒を引き連れ關守は……入りにける

『……忝けく覺ゆるぞ』

『……千片をも上ぐる某……

……あら勿體なや』

〳〵つひに泣かぬ辨慶も……

……一期の涙ぞ……

……殊勝なる……

左へ珠數を下げて握り束の形で極る

右の足から廻つて富樫を見て摺足で後見座へ行く

四天王義經の居所が極ると辨慶右に中啓を持ち、左に袖口を抑へた能の構へで下手から廻る様に前へ出て、義經と少し離れて下手寄りに斜上手向きに右膝を突いて坐り、兩手を突いて義經に辭儀をする

この台詞終つて辨慶兩手を上げ膝に置く

右の手を前へ出して見る

右左と手を突く

中啓を持つた右の手で大口の裾を取つて右膝を進め

中啓で指し乍ら左の膝を進ませ

左の手を下へ突き、充分愁を表はし

右の手の中啓一寸太股に立て左

……判官御手を取り給ひ

『山野海岸に……武士の』

〽鎧に添ひし袖枕……

……かたしくひよも……

の手を左の目に當てゝ泣く形
義經の手を差出すのを見た辨慶はトントンと膝で二ツ跡へ下つて右の手を平に下へ突き中啓を下へ置き、左の掌を上へ向けて前へ出した形で泣き辭儀をする
中啓を拾ひ、二膝前へ出て、中啓を前へ置いて居直る
左の手を開いたまゝ高く上げその肱を折つて肩の邊で極め、右の手も開いたまゝ左の脇の下の前へ浮かせて鎧を着る心に下げ、次ぎに右の手を前と同じに上げ、その肱を折つて肩の邊で極め左の手は右の脇の下の前へ浮かせて鎧を着る形をして、前の中啓を右の手で取つて膝へ立てる
左の手を浮かせ、其の邊へ掛ける形をして其肱を中啓へ突く心に浮せて直ぐにそれを外すと同時に左の膝をトンと突く

……波の上……

（合の手）
テチチン

……或る時は船に浮み……

……風波に身を任せ……

左の足を伸して開き、右の手は中啓を持つて平に伸し、左で袖口を持ち、首は上手を見上げた形を極る
此の台の手に合せて、右の中啓で左の掌を打ち、次ぎに左の掌で右の中啓を打ち、又返して中啓で掌を打ち、三ツ目に左の膝で拍子を取り
その中啓を横に前へ構へて櫓の心に持ち、左の手を矢張りそれに持添へて船を漕ぐ形で最初一ツ引き、又一ツ前へ漕出すと同時に首を右の横へ向ける工合に三回漕ぐ
手を左右に開き右の手が下になる樣に抱き、また左の手が下になる樣に抱き、また右の手が下になる樣に抱き、更に兩手を開き右の中啓を胸へ當て、左の手を小廻りして前に構へて一寸上手を見る　（以下次號）

天神祭の所作事に就いて

天滿宮教學部主事
藤里好古

◇　◇　◇

天神祭は何としても大阪、否、日本のお祭である。傳統に誇る町人魂の躍動するお祭である。であるから、豪放豁達なる雰圍氣の裡に、絢爛豪壯でよく所作やレヴューに借用せらるゝ。しかし昔にはそうした事があまりなかつたやうだ。

並木正三の「大坂神事揃」に、「天神祭」を扱つてゐるが、これは「所作」ではない。かつて松竹座で大レヴューとしてこれを出した。さうして非常な好評だつたので、昨夏大阪劇場でも亦やつた。今度のはさうした唯だ他愛もなく騷々しいものではなく、しんみりと鑑賞していたゞく樣に、滋味豊かに筆を新らたにして中座の若手の連中の爲めに書卸したのが、この「所作事天神祭」の一編である。

無論、例の天滿市の側の小町娘お澤をテーマにして、獅子を出したり、揃ひの若い者を出したり、御迎人形を「胡蝶舞」「木津勘助」「安倍保名」と三つまで扱つて見た。背景も、お祭の幔幕や、お祭り提灯や、豪華な繪卷物風の然も灯入と云つた、非常に優美な場面のみを點綴した

近頃、めつきり進境を示した、故鴈治郎の遺兒中村芳子がお澤に扮して、お夏でもなく、お光でもなく、大阪情緒を舞はうと云ふのである。

福助、吉三郎、段猿、錦吾、扇、壽之助等色とり〴〵に、大いに「天神祭」を踊らうと云ふのである。

何としても「祭」と「踊」とはツイお隣同士で、其はやしの豪華さもすぐに取り入れらる一つであらう。

「藍水の祭」
「篝火の祭」
「壯音の祭」

それが、どんな風に舞臺化され、あらゆる舞臺機構を驅使して演出されるか、來る廿五日の「本祭」に魁けて、道頓堀は中座に展開される。このイミテーションを御鑑賞、愉しい童心に甦られむことを……。

◇　◇　◇

上演歌舞伎狂言解題

世話　垣鈍文

★夏祭浪花鑑（中座）

元祿年代に起りました魚屋團七の親殺し事件を元祿十一年の一月から翌年の春にかけて初代片岡仁左衛門が大阪の片岡座で大當りを取つて上演致して居りました記錄よりヒントを得まして、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の三人が作曲致しました九段續きの淨瑠璃で、世話物の淨瑠璃で九段續き程の長篇は、本作を以つて嚆矢とするので御座います。

操に上演されましたのは延享二年七月十六日（百九十二年前）初日の竹本座で、此の時も非常な大當りを示してその年の暮まで續演されたので御座いました。當時の人形遣ひの名人吉田文三郎は色々と新工夫を取り入れまして、例へば夏芝居と云ふので人形に帷子の衣裳を用ひたり、義平次殺しに本泥本水を使用したる等（泥仕合と云ふ）色々と工夫を加へましたので、餘計此の狂言が評判を取つたので御座いました。今にも傳はる團七縞、德兵衛縞、又はお辰の衣裳等は全て文三郎の考案になつたものなので御座います。

歌舞伎に初演されましたのは京都の都萬太夫座で同年の八月五日より上演さ

夏芝居二題

大槻たもつ

A

怪談劇づら師の腕の見せどころ

れました記錄に次いで、同年十二月三日よりの大阪嵐三左衞門座、同じく十二月十日よりの大阪市山助五郎座、同じく十二月十五日よりの大阪嵐三十郎座と三座競演されましたのが古い記錄として殘つて居ります。

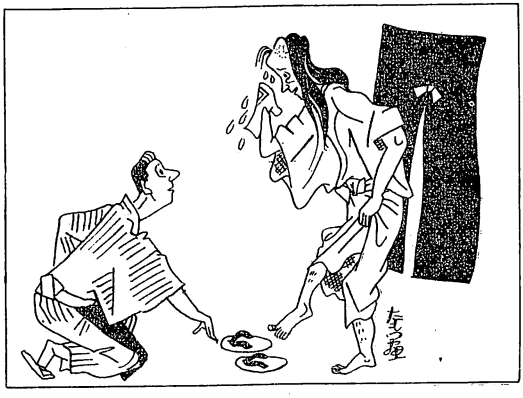
全曲の內最も有名なのは矢張り今月も上演されて居ります六段目と七段目の件りで御座いまして、最も世話物の氣分を强調したる場面で、殊に七段目の殺し場は歌舞伎獨特の殺し場流行の濫觴となつたので御座いました。また此の作中の人物の持つ俠客的氣質は後世の俠客物狂言に非常な影響を與へたので御座いました。

★時今也桔梗旗擧（神戸松竹劇場）

本外題を「時桔梗出世請狀」と申しまして鶴屋南北の作品で全篇は五幕十二場ですが、最近上演されまするのは三幕目の第一場と第二場に限つて居ります一名「馬盥の光秀」とも申しまして、太巧記十段目と共に光秀物の双璧とされてゐる傑作で御座います。

初演は文化五年七月二十五日（百二十九年前）初日の江戸市村座で御座いました。最近關西で上演されましたのは昭和六年十一月の中座で吉右衞門が得意の光秀でしたが今度の友右衞門の光秀が、何處まで吉右衞門に肉迫して行くかゞ興味ある觀ものと云へませう。

作者が織田信長（春長）を全く暴君的に取扱ひ光秀の反逆を必然的なものに描いてゐるところに此の作の面白味が御座いませう。



B

幽靈も幕がおりると草履はき

東京へ來た松竹家庭劇

中山楠雄

久し振りで（松竹家庭劇）が上京した。

この前來たときの成績は香しくなかつた。之れは、家庭劇の內容が悪いのでも役者が下手なのでもなかつた。東京の人達に劇團として馴染が薄かつたゝめである。事實、小織は新派の長老で、東京人と馴染は相當あるし、山田隆彌にしろ、元安豊にしろ、寧ろ東京が地盤のやうな人達である。けれども、これは個人々々としての場合であつて、一團としては東京に馴染が薄い譯である。

曾我廼家五郎は上手な役者に違ひない。その芝居は面白いに違ひない。だから當然上京の都度大きな成功を納める、と云へば嘘になる。五郎は、東京に馴染が深い。殆んど隔月には東京へ來て定打ちしてゐる。——その結果、五郎の芝居には信用が出來、安心して見物に行けるから必勝するのである。

これは獨り家庭劇のみではない。志賀廼家淡海も、東京に馴染がないだけ

の理由で、何時も失敗してゐる。劇團の成功のためには、或る程度まで、犧牲をしのんで馴染をつけなければ嘘だ。定打ちしなければ嘘だ。

梅澤昇の芝居は、淺草の人氣をさらうやうになつたが、さうなるまでは充分三年の月日を要してゐた。

——)•(——

閑話休題——家庭劇は、久しぶりで六月、新宿の第一劇場へ出た。

今度は、この前の時のやうに全然馴染のない譯でもなかつたから、この前のやうな失敗はしてゐない。

芝居は事實、面白いし、新派と五郎の間を行くやうな大衆をねらつた行き方、狂言の立て方も贊成である。その上に、役者連中の確かな腕と、渾然とした一座の團結とは、非常な強味だつた。

實を云ふと、東京の人間は斯う云ふ芝居を求めてゐるのである。斯う云ふ健康な、一家揃つて見物出來るやうな芝居を見つけてゐるのである。丁度、東京人が求めてゐる芝居を、家庭劇の連中は培つて來てゐるのだから、見物した連中はいづれも大滿足だつた。

私は、この座に別に注文を持たない態度もこのまゝでいゝ。出し物の選定もこのまゝで結構だ。十吾は天才的に巧い。小織は流石に大きい。皆腕達者で、粒選りだ。

この芝居が、東京に馴染が出來てきさへすれば、これ以上、どん〳〵大きくなり、人氣を博すること疑ひなしである。

定打ち出來ないまでも、年に三四度は來るといゝ、このまゝ大阪へ歸つてしまつたのでは、折角つきかけた馴染を振り落すやうなもので、家庭劇存立のために取らない策である。

一つ〳〵の狂言の批判や詮索は、それ〴〵適任者の方が書くだらうから、わざとふれないことにする。私は、たゞ、家庭劇の態度、出し物に大贊成であること、東京人の現在求めてゐる芝居であると云ふこと、願はくば盛んに東京へ來て、馴染をこしらへろと云ふことだけを熱望して置かう。

——)•(——

（カットは家庭劇着京の際の寫眞）

八月の中座
家庭劇歸演

十吾一座に就いて

長谷川　伸

家庭劇はおもしろい笑劇をみせる一座だ。五郎一座よりは劇團の格が下だといふ印象を與へる處もあるが、その以外の喜劇團に較べると、相當に整つてゐることが感じられた。但し、東京初演のときの演し物は、すべて手心のある物ばかりだつたので、初日は初日でも移動初日であつて、初演の初日とは違うから、初演に於ける本當の手並といふものは判然しなかつた。

何よりも感ずることは、十吾だけが工夫と稽古とを積んでゐて、その他の俳優はからだだけで演じてゐるか、さもなければ幾つか持つてゐるうちの式を、その都度にとり出して演つてゐる嫌ひがあつた。たとへば雜ツとすます稽古でも十吾は工夫をつめる立場にゐるのだから、十吾が二日間の稽古だつたら他のものには尠くとも四日半の稽古を致してゆくべきではあるまいか。

稽古が淺いのではないかと疑はれ、且つその淺いのをその儘に延長してゐるのではないか。工夫を積むことが餘り尊重されてゐないのではないか。今まで演つてきたものの中から出すだのけ工夫ではないか。

さういつた疑問が持てた。

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇
南地ホテル
一宿　三圓　二圓　一半
額半　憩
南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

面白いことは面白い。私も大に笑つたしかし、笑へば足りるとするだけでは、良いとされないので、以上の如き不足をいつてみた。

不足ならまだ他にもある。その第一は脚本である。脚本が悪いといはないが洗練が必要だ。東京公演の此等の脚本を、あの儘でいいから改修を施さなくてはならない。

一例だけしかあげないが『御難天一坊』の女中の長い會話の如き書き方が悪いといふのである。

笑劇の中に喜劇が二つ乃至一つはあつていい。

私のいふ喜劇といふのは、手短くいへば、見物を笑はす爲のみに書くものでなくして、人間を書く爲に書くもののことを指す、一例だけしか擧げないが『ハツトンは婆さん』の當の人物のかき書がよろしくないといふのである。

十吾を中心とする家庭劇は、エノケンともロツパとも違ひ、それよりは古典的で、しかも、人間描寫をやつて貰ひたい劇團である。

それさへ出來れば、笑はせずとも笑ふ筈であり、一歩を進めることにもなり、東京に地盤もできると思ふ。

松竹家庭劇
南座開演中
晝夜二回開演

ンリウタオネけに 枝結
淋病はコナイン
…科病物花…
藤原医院
☆ 番六三六二戎話電 ☆ 入西側ノ溝筋橋戎 ☆
淋病はコナイン
ンリウタオネけに 枝結

おみやげ袋

石河　薫

○嬉しや子供扱ひ

歸京――と、云つても今では大阪に住居をもつてゐます私。さりとて東京から、大阪へ行つた私とて上京――と云つたら懷しさが足りません。

とにかく、八年で東京の地を、踏んだ私は、嬉しくつて〳〵毎日々々お友達やら、親戚やら、お引立て下さるお方達を訪問いたしました。

『まア、よく來た、サア上り。』

『何か食べたい物があるでせう。何を食べる？』

『いゝぢやありませんか、さア、もつと、どつさりお食りよ。』

『本當によくまア大きくなつたのね。』

と、其れこそわんさ〳〵のおもてなし。それが二十年振り、二十五年振りといふ、古いお馴染みが多いので、丸で私は子供扱ひですが、溫かいお心持ちに、嬉しい涙が……。

私は、たんと甘へて隨分に懷しさに浸りましたわ。

○お師匠様のお情け

『ねえ、捨てないで、踊りの方も勉強して下さいよ。』

と、水本流の御師匠様をおたづね致しました時、斯うしたお言葉を伺ひました私は、ギクリと胸に應へました。永い間お世話をかけましたのに、舞臺の方が……と云つて踊りの方を、ちつともやりませんでした私は、私自身の事よりも、御師匠様に濟まない氣持ちになりました。

心から、今後は踊りの方も懸命にやらう……と、我が胸へ誓ひました。

○誰も同じ思ひ

東京の地を踏んだら……と、第一になつかしい『おうぎよ

ち』を食べに……と、思つてましたので内の書生達と一緒に淺草へ、食べに行きまして、その歸るさ、フト向ふ側を通り過ぎた人……木村さんだわ……と振返ると、矢つ張りそうでした。

『見てゝ御覽。アノ人も、東京の人だから「おうぎよち」へいらつしやるのよ。』

と、皆で立止つて見てゐるとも知らぬ、同じ座員の木村さんは、づうツと、おうぎよちへ……

『ねえ、そうだらう……』

と、何がなしに私は、一人で嬉しがりましたのよ。

○まア！とおや〳〵！

本當に大東京ですわね。何處へ行きましても、道路の美しさ建物の立派さ、唯もう見蓮へる計りで、私は、赤毛布よろしくといふ態たらくなんです。

用達先きの築地から、一番近いデパートへ寄つて行かうと思ひまして自動車に乘りますと、走り出したと思ふと、車は止つて

『ハイ、三越で御座います。』

と、扉を開けられた私はまア！

『ハイ、二丁位です。』

と、聞かされて、今度は、おやおや！

○も一つ自動車失敗

淺草からの歸るさ。

東京の自動車の運轉手はボイと應待なしで乘ると、法外な賃金を取ると、聞されてますので——前にも失敗してるので——

『新宿まで幾ら？』

『八十錢下さい。』

こゝで一寸東京馴れしたところを發揮したいので、

『七十錢でいゝぢやないか。』

と、云ひますと、

『ふふん……』

と、來たんです。如何にも、その運轉手が、小馬鹿にしたやうに鼻先きで、セセラ笑つたんです。この田舍者めツと、云つたやうにね。

むツとした私は、後ろに居る自動車に、

『行つとくれ。』

と、皆で、どや〳〵と乘つて先きの運轉手の鼻をあかしてやつた積りで、宜い氣持ちで、新宿さして走らせたんです。

宿の前に着けて、

『お幾ら？』

『一圓頂きます。』

えツ！ と、驚きの聲をあげかけた私は、それを呑み込んでグウ！。

ホラ、袋の中にはまだあるんですけど、もう定められました紙數を超過しましたんで…あら、ずるいと仰有いましても、本當なんですわ。機會がありましたら、又ね…御免下さいませ。

東京みやげ話

元安　豊

今度の東京進出は、一座の誰もが、『とても駄目だらう劇團として、お馴染がないのだから』と内心不入りを覺悟の上京でした。處が、どうでせう。案じるより生むが易く各新聞は筆を揃へて賞め立て、見物は口を極めて『成程面白い芝居だ』とそれからそれへと宣傳してくれたお蔭か、殊の外の好成績を納めて歸る事が出來ました。

關西の皆様、家庭劇を藁の上からお育て下すつた關西の御贔屓の皆様へのお土産として『東京でも好評を得ました。成績は上々吉です』これ位ゐよいお土産はなからうと思ひます。

芝居の方のおみやげは之れでお喜び下さる事と思ひますから上京記念として東京の中村花秀宗匠が主催で句會を催して下さつた事を一寸御報告申上ます。

日時　六月日正十二時より
場所　芝白金台町守田勘彌氏宅
出席者　（東京側）中村花秀、錦畝、其他。
（家庭劇）澁谷天外、御室鄉子、村瀨月宿、それに私。

『題』　葉柳、松葉牡丹、時鳥

葉柳や汲む間憩へる撒水夫　天外
時鳥測量班のキャンプかな　同
葉柳や銚子通ひの船が着く　錦畝
落墨の手紙となるや時鳥　同
月ばかり只一ト聲を時鳥　鄉子
水に添ふ宵の歩みや夏柳　花秀
晝を鳴く山時鳥かな山深く　同
夏柳もやひし舟の綱だるし　月宿
聲呑んで山路行きけり時鳥　同
山内は靜かに更けて時鳥　元安
領事舘の晝靜かなり日照草　同

扇雀の進む途

藤原羊平

歌舞伎若人の花形中村扇雀君が亡父の遺藝を演ずる場合その演技や風貌が鴈治郎に酷似してゐる點に興味を感ずる見物はかなり多い。これは舞臺藝術に偉大な足跡を殘した大成駒家への追慕の至情であり、同時にその遺兒である扇雀君への良き鞭撻であるべきである。然るに扇雀君自身は內心「鴈治郎そつくり」と評されることを餘り喜ばないやうである。守田勘彌君が羽左衛門直傳の「辨天小僧」や「源氏店」を演じつゝも、「羽左衛門そつくり」と一口に片付けられて了ふことを厭ふのと同じ意味合に於て、扇雀君も今日の歌舞伎界の花形であり多大の未來の有する舞伎藝術家である以上、事毎に亡父の模倣と片附けられては、彼の自尊心が納まらないであらうそこで私は公平な立場から扇雀君の舞臺が何程左樣に鴈治郎そつくりであるか、又假にさうであるとして、それが扇雀君自身の意識的な模倣であるのか、或は意識の上では模倣を避けてゐる積りでも、外觀の上ではどうしても鴈治郎を見物に聯想させる先天的な何物かゞあるのか、それを聊か檢討して見たいと思ふのである。

◇

茲で誰しも考へることは扇雀君の舞臺と一口に云つてもその演ずる役によつては必ずしも同一に論ぜられないのではないといふ點である。「望みの港」の忰のやうな明治初年頃の青年を演ずる新作畑の扇雀君からは見物はさのみ鴈治郎への酷似を感じないであらうし、石切梶原などを出した場合は反對に著しく鴈治郎への聯想の濃度を深めることであらうが、併し過去に於て扇雀君が主に親讓りの役を演じ、又將來に於ても主として親讓りの舞臺に生きなければならない俳優である以上、ここでは新作畑の役の場合は例外として論じて差支へなからうと思はれるのである。極言すれば玩辭樓十二曲を演ずる場合の扇雀君を以て同優の舞臺のすべてゞあるといふ見地から論じてもよいといふこと

扇雀の進む途

なのである。

◇

それは一代の名優と謳はれ歌舞伎史上に偉大な足跡を殘した鴈治郎丈も、その名優としての折紙をつけられた藝術は、かの玩辭樓十二曲以外には二三の例外はあつても、さのみ多くはない點から割出すべき議論なのである。忠臣藏の由良之助は玩辭樓十二曲ではないが、同じ由良之助役で碁盤太平記が十二曲に含まれてゐる以上、かうした見解も成立つといふものではないかそして近松ものを中心として玩辭樓十二曲の逸品に生彩を放つた鴈治郎の役々は何といつても完成された偉大な藝術であつたし、而もその完成された藝術を後世に傳ふる繼承者は、本人の好むと好まざるとに拘らず、御曹司扇雀君に課せられた使命である以上、親讓りの役々に於てのみ善惡共に批評されなければならない宿命があり、又さうであつて毫も失當ではない筈であるそこで本題に立返つて、扇雀君の藝が意識的な鴈治郎の模倣であるか否かといふことであるが、これに就ては扇雀君はいろ〳〵な機會に辯明して「私は決して親父の物眞似はしてゐません。たとへ親讓りの役を演じても扇雀には扇雀の藝と工夫があります」と言つてゐるやうである。私もこの言に全然耳を傾けないものではなく、同時にその心構へこそ前途ある名門の花形の常に堅持せねばならぬところのものではあるが、私は少くとも玩辭樓十二曲の遺藝を演ずる場合にあつては、よろしく扇雀君たるもの、最も大膽に卒直に自我を捨て、個性をなげうつて、鴈治郎の模倣にこれ努めて貰ひたいと希望するものである。

◇

假に扇雀君の辯明通り、親父の物眞似でないとして、然らば、それにも拘らずどうしてあれまで鴈治郎に生寫しなのかと云へば、血を別けた親子である以上似ぬのが寧ろ不思議で、寸こそ足らね、素顏舞臺姿、何れより見るも若かりし日の鴈治郎丈を髣髴せし

扇雀の進む途

むるものがあるのは否み難い而も風貌がさうである上に、何といつても子役時代から膝下にあつて薫育された藝の影響は大きい。六月の京都南座に於ける「河庄」の治兵衛でも、扇雀君自身に言はすれば一から十まで親の眞似ではあるまいけれども見物の眼には悉くが鴈治郎の眞似事と映ずるのである。これは永年の影響の本質化である。風貌が瓜二つであると共に、舞臺の演技も知らず〳〵の間に同化されて了つたと見るべきであり又如何に扇雀君が抗辯するにせよ、亡き鴈治郎が研究に研究を重ね、工夫に工夫を凝らして彫琢された遺藝を演じやうとすれば模倣なくして全きを得るの不可能なること言ふまでもない。故に扇雀君たるもの、心構への上では充分自我と個性を尊重すべきではあるが、舞臺の上では、特に親讓りの役の上では、前言つたやうに潔く鴈治郎生寫しに甘んじてよいと思ふのである。今でこそ鴈治郎逝いて間もなく、すべてに比較される歩の惡さはあるが、これも六年七年の後には　鴈治郎の舞臺への印象も感銘も次第に薄らぎそれにつれて鴈治郎の舞臺を知らざる次の時代の歌舞伎ファンも生れてくる。その時代にまで一代の名優鴈治郎の偉大な藝の力を引ずつてゆくものは實に遺兒扇雀君を措いて他になく、又當然扇雀君の負ふべき重い責務であらねばならぬ。言葉をかへて言へば、鴈治郎そつくりの世評に甘んじてその遺藝の生寫しに努力することは、結局扇雀君自身の藝術を大成さする所以に外ならぬと信ずるのである。

八月の道頓堀

夏特輯

五日發賣

東京公演より歸阪して

語る人……十吾・天外

★A★

曾我廼家十吾

このたび日頃の願ひが成就して六年振りで東上しまして新宿の第一劇場で公演さして頂きました。お蔭様で豫想以上の御好評を頂戴しまして、こんな嬉しいことはございまへん。何しろ東京のお客様が關西以上に藝のやかましいことは事實で、聞きます處では同じ芝居を十五日間つめるお客様があるさうです。こゝにある新聞の切抜きは私達の劇評ですが、素人の方なのやそうです。この方は面白い方で私達の芝居を一週間もつめて見て下さつたばかりか、名物のせんべいなど下さいまして お心安くして頂きました。そしてカブリツキの所で「何てうめえんだらう」と大きな聲で仰ツしやるのです。芝居をやつてゐる私達は何だか尻こそばくて、のびて終ひました尤も此の方の御本職はソバ屋さんなのだそうで道理でのばされたのかも知れまへん——落し話の様ですけど……。

向ふのお客様は中々笑つて呉れませんね。大阪の言葉を大阪の聲で聞かすので大阪の方が面白い。東京の方は上方言葉の味が判らないので無理です。その變り泣く事は關西のお客様より早く泣きます。面白いですね。

それに面白かつたのは、東京の方に關西では女の方が男よりよくヤジりますねと云はれた事でした。その譯を聞きますと、關西からのラヂオの舞臺放送のあるときは、女のヤジり聲が非常に目立つて聞えるそうです。だから、そんなに云はれるのでせう。御婦人方よ、御注意下さいよ。

私達も色々と批評されて參りましたが、結局、苦勞人とキママ人と無智な人とに依つて見解が異つてゐるのではないですしやろか？。伊原青々園さんが、笑はさうとしてゐる人と、眞面目でゐる人とがちぐはぐになつて溶合つてゐないと云ふ樣な意味の事を書いて居られましたが、日頃から私が思つてゐることをピツタリ云ひ當てられたのに恐れ入りましたね。

何？、もう開幕やて……ではこれで今日は勘辨して下さい。またこの次ぎにゆつくりと……。

× ×

★B★

澁谷天外

六年振りに上京してお蔭様で好評を博して歸阪致しました。六年と申せばスピード時代の今日では一昔前と云へませうね。私は上京すると直ぐ此の前に上京した時に色々御厄介になつたさる待合に御挨拶に參りました。丁度女將がお留守だつたので上り込んで待たして頂いて居りますと、歸つて見えた女將がスツカリ前の方とは變つてゐるんです前の女將が死なはつたのですな。私はテレ臭ふて赤面してゐますと、今度の女將も同情して下さつて、組券をアツサリ引受けて呉れはりましたがあんな處は矢張り東京式だと思ひますね。

東京のお客様には兄貴(十吾)も云つて居る様に上方言葉が解らないので困りました。「ボロイ」と云つても通じないのだから通じる様に言葉を變へなければならない。そうした苦心が必要です。しかし何と云つても笑ひは大阪が本場です。その證據には漫才でも東京のは面白うおへんがな。

私達の芝居も近頃では本眞に脚本に苦心をして居ります

東京ではムーランルージュをよく見に出掛けましたが、脚本は中々氣が利いてゐて面白く出來て居ります。所謂新喜劇と云ふやつですな。しかし、私達があん風な脚本をやつても、私達のカラーとは一致しまへんやろ。私は作者の伊馬鵜平さんに會つて新喜劇とは何ぞやと聞きましたら、單なるクスグリではなくして諷刺的なものやそうです。しかし諷刺では人は中々笑つて呉れません。まア「苦笑」をねらふのですなあ。

でも私達の芝居も段々あゝした新らしいものを上演しなければいかんと思つて居ります。何ぞえゝ脚本はおへんやろか。

東京は洋裝の素的な婦人が多いですね。私は今迄洋裝が嫌ひでしたが、ピツタリ身についた洋裝の美は、今度の上京で新發見しました。

これだけでも東上した値打はあります。矢張り年に一度は、東京で打ちたいですなあたしかに勉强になります。お客様がこちらのお客とは違つて、筋だけ見に來るのやなくて、穴さがしに來るのやからたまりまへんがな。

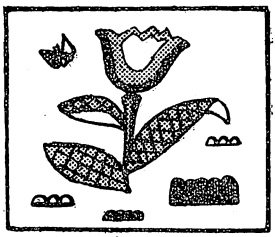
一番へいこうしたのは酒の惡いこと。と云つて此方から一月分の酒を持つて行くことも出來ず、樂しみがないので弱りました。當分は一ヶ月間の埋め合せに、ウンと美酒を味はひたいと思つて居りますこんなこと餘ンまり書かんとおいとくなはれや。

(文責・大橋孝一郎)

八月の中座は

松竹家庭劇

凱旋興行



芳子ちやんの爲めに

――〝七夕夜話私言〟――

鳥江銕也

『鹽原』の袖切りの娘を見てゐた白井會長が、もうあれならどんな役でもこなせると思つたかどうか……。とにかく、中村芳子の藝境の進歩については、白井會長だけではない。誰でもが認める所で、何か彼女の爲めに、うんと修業になる芝居を演らせたらといふ望みも、何處からともなく湧いて來た。

七月の中座はまた久し振りに關西若手の涼み芝居である。芳子のためには惠まれたチャンスと云へる。芳子を舞妓にして、何か上方特有の氣分を現はした芝居……。白井會長の頭の中に、そんな考へがポツリと一つ芽を吹いた。その折りに丁度居合せたのが私である。『君一つ書かないか』『書いて見ませう』『ぢやア、君と二人で考へやう』『考へませう』

さうして私は芳子の舞妓姿を瞼のうらに浮べ、いぢらしい人生を考へた。

不世出の名優、中村鴈治郎の血を享けた芳子ちやん、家庭的には立派な「こひさん」で育つて來た少女である。彼女の舞妓姿をおもふ時、私は武家の娘か何かかう氣品高い感じの娘を想像した。

『時代は明治初年頃で芳子を充分に使つたもの……』白井會長の頭にも彼女の感じから想像された人生が發展しつゝあるらしい。その頃私の頭の中には、舞妓といふ可愛らしい花柳界の一存在が、金力や權力に反抗するいぢらしい姿を纏めつつあつた。

私は自家の書架から凡て明治初期に關する書籍を漫然と渉獵した。そのうちに『七夕夜話』の素材が蒐められた。貧乏士族の生活狀態、廢刀令直後の世相、こんなものが今度の芝居を書く上に大きな

參考になつた。

正直に云ふと、自分達松竹の內部にゐる者は、俳優の性能？　がよく判る關係から、一つの筋を立てるにしても、あらかじめどの役は誰と決めて掛る習慣になつてゐる。今度も私の芝居に働いてくれる人達としては、芳子の外に段猿、錦吾吉三郎、壽之助、三好榮子、菊田惠美子等と初めから判つてゐたので、充分その人達に向くやうにと心掛けたつもりである。（こんな風に俳優を見て創作の筆を執る事は、劇作家として或ひは邪道かもしれない、早く自由なものを書きたこと思つてゐる。

『七夕夜話』は元會津藩士だつた速見宗六が、元治元年七月蛤御門の變に負傷して、維新以後は大いに落魄し、一人娘のお千世を大阪新町の扇屋へ年期奉公に出した。扇屋では士族の娘といふので、隨分金をかけて立派な舞妓に仕上げた。そのうちに舞妓になつたお千世を世話しやうといふ遊客が現はれるが、娘にはお茶屋の息子に愛人があつて『女の一番大切なもの』を金力の前に捧げるよりも、愛人の爲めに例へ自分は『盜み』の罪を犯しても敢然と守り通すといふ筋である。第一場は親元の家、第二場は新町のお茶屋第三場は元の親元の家にした。

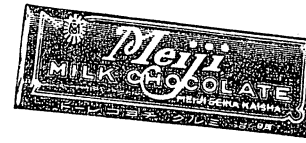
私はこの芝居で多分に季題趣味を扱つて見た。第三場を通じて七夕祭の二三日前と當夜なので、例の色紙をくゝりつけた青笹を舞臺に持出して見た。それから毎回ではあるが、私の上方物には必らず大阪の隅々までも描いて見たいといふ野心があるので、今度は堀江の和光寺裏と新町九軒とを扱つてゐる。御池通りの裏長屋で、向ふには青葉にかくれて和光寺の橋などを見せて實感を出させた。それからお茶屋の臺所は出來るだけ寫實にして、上方特有の舞臺とした。それからもう一つ、これは手前味噌だが、和光寺裏では近所の腕白小僧數人が『子買オ〳〵』や『鬼ごと』をしてゐるのを使つて、大阪の市井の空氣を出して見た。それとお茶屋の臺所の場では出來るだけスケッチ風にいそがしい長火鉢風景を現はして見た。幸ひにこれらの點に効果が上つてゐれば結構である。

芳子の事を關西の水谷八重子だと誰かが云つた。私はその評判が實力の上にもたらされる日を渴望する一人である。その意味でこの芝居では、恐らくは重すぎると思ふ位の役を書いて見た。が、その懸念は稽古を見てゐる時から一掃され初日に於ける彼女の技倆は僅か十七歳の少女とは思へぬ位、天才的な閃きを見せ

てくれた。白井會長も私も全く舌を巻いたといつても過言ではなからう。芝居の善悪は第二としても、彼女の舞臺度胸、彼女の演技に驚嘆させられたのである。芳子はこの『七夕夜話』をスタートとして、これからがほんたうの女優生活を初めるのである。今までの修練時代は完全に卒業ずみで、この一役からこそ本格の舞臺を踏んでもらひたいと思ふ。私は芳子ちやんの爲めにこれだけを云ひたいのである。然し、決して自惚れないで、自重と努力を絶えず心掛け、天晴れ名優の忘れ形見としての名を辱しめない様にして貰ひたい。さうして女鴈治郎としての名聲を博して貰ひたい。（七月某夜記）

明治チヨコレート

優れた味と豊富な榮養を持つ近代人齋しく愛好の食品



明治製菓株式會社

家庭劇帝都進出興行

上京感銘錄

監督　山上貞一

富士山を見ないでは、どうも東京へ行つたやうな氣持がしない。これは近年一年に一、二回上京する私が、幸ひ富士運がよいといふのか、いつも車窓から富士の雄姿を飽くなく眺めて、ひとり上京の意義を深からしめて來たのに、今回はぐつすりと寢込んで横濱近くで眼を醒して、まづ車窓の富士を見失つてしまつた。それに折柄梅雨期で雨はあまり降らなかつたが、天候定かならず、在京二十數日その往復にも富士の雄姿に接し得ずに旅は終つた。遺憾といへばこれだけで此度は家庭劇の帝都進出興行に監督としての上京だけに、實に友情溢ふるゝ先輩諸氏なり友人諸君の歡迎を滿喫して、全く喜悅の涙にむせぶものがあつた。

私は忘れてならないそのよろこびを書いて上京感銘錄とする

1　綺堂先生

澁谷驛を降りて赤十字社行のバスに乘つて、府立商業前で降りると、眼印の赤いポストがある。私はいつもこのポストの前で右顧左眄する。幾度來ても、そして校庭に添つて歩き出し樹の間に瓦屋根を見て安心する。此度の自動車の中でもそうだつた。その瓦屋根こそ恩師岡本綺堂先生のお邸である。呼鈴を押して御門を開けて貰つて玄關から恐る〳〵應接室に通ると、先生の書齋からペーパーを繰られる音がする。あゝ又先生の御勉强中のお邪魔をしてすまないと、思ふ間もなく先生の溫顏に接し得る。此度は齒を御治癒中らしく拔けて見えるので、一層慈父に逢つてあまえさして貰ひたい氣がした。

『今度は君が芝居を連れて來ての始めての事だから、何とか賑

やかにしてやりたいと、額田とも相談をして、花輪も用意してあるし觀劇會もやつてあげるが、まあ、しつかりやり給へ』全く感激措く能はず、そこへ奥様のいつもながら御壯健なお顔をにこやかに拜すると、もう私は故郷に歸つたやうな、實に嬉しい氣がする。

お話好きな先生は團扇でゆるく涼風を求められて、次から次へと御高說は止め度もない。同じく門末を汚してゐても、東京に住む者は幸福だとつくづく羨ましくなる。

此度の第一劇場の興行が、いかに好評を博したかを思ふ時、私はまづ綺堂先生の御高配を深謝したい。

2 白十字の夜

九日初日といふ七日の朝、大阪から遙々と鳥江が上京して來た。東京驛のプラットホームで十吾と三人立つて朝の清々しい陽光を浴びた時は、全く此世の春に會ふ心地がして嬉しかつた。その夜新宿の白十字の階上では私達の歡迎會が開かれた。額田六福兄が世話人として、大新派の『片時雨』の作者として一躍筆名を走せた三好一光君が受付を承つてくれた。先づ川村花菱氏の歡迎の辭は懇切溫情を極められたものであり、渥美清太郎氏は激勵と共に東京出演の教示を親切に說いて下された。鳥江と私は萬言を盡しても盡きない謝辭を交々立つて述べ曾我廼家十吾を紹介した。出席された方々は中野實、金子洋文、竹田敏彦、龜屋原德、小野金次郎、津村京村、林二九太、大隅俊雄、藤島一虎、原巖、豊田豊、本庄桂輔、寺田鼎伊藤松雄、永田衡吉氏ら凡そ現代の劇文壇に於ける中堅作家は悉く一堂に會せられた感があり、更に大村嘉代子、弘津千代、北林余志子女史らの閨秀作家の紅幾點あり、本社よりは巖谷三一、小出英男、淺野武男君らの文藝部總出の處へ、舞臺社より小林宗吉君ら同人十數名これも總出席で、更に中央演劇より

白十字階上鳥江山上歡迎會

は山口太郎、『新演劇』より大島萬世、『テアトル』より染谷格、早稻田演劇協會よりは白石靖氏らの顔も見えて、東京でも

珍らしく賑やかな夜として、私らは歡迎されたのであつた。鳥江、十吾とともに終世感銘し深謝する處である。

3　ミノさんとびんげん君

ミノさんとは中野實君のことだ。びんげん君とは竹田敏彦君のことだ。ともに今をときめく流行作家としての第一人者。この第一人者が此度の上京中、最も茶氣滿々破目を外した惡友の第一人者であつたとは。

『山上が早く歸らねば仕事がてんで出來ないよ』とミノさんがこぼせば、

『よろしいがな。まだ送別會をやらんならん』とびんげん君は眼を細くする。

早稻田の森に夫唱婦隨の愛の巢をミノさんが自作そのまゝに高調すれば、モダン小說でお馴染の目蒲電車田園調布に、大邸宅を新築し愛孃に『藤娘』を踊らせて、びんげん君はペンを走らせてゐる。

そうして夜な夜な『友遠方より來るまた樂しからずや』と酒盃をともにしてくれた。そのうちにも小說や戲曲の材料は彼の妓此の妓の口より洩れる。それを聞き洩らさじと醉眼を光らす。突んだ大星由良之助。だが、持つべきものは親友で、このやくざな旅人の爲に實に時間を割き、種々高配に預つた。

5　初日と二日目

さて、新宿第一劇場、問題の家庭劇、帝都進出興行の初日が開いた。大阪より多田參與が我が子の上京如何にと前夜よりの

出張、本社よりは井上常務を始め、佐藤營業、植木宣傳、小出通信各課長が總出だ。監理室には川尻清潭氏が眼を光せてござる。岩田主任以下汗だくの態だ。觀客は陸續と入場されて補助椅子が出た。やれ、嬉しやと見ると、大衆文藝の大家土師清二氏が人待ち顔だ。一別以來の挨拶を交してゐると、そこへお連れが見えた。これは驚いた、長谷川伸氏に甲賀三郎氏だ。挨拶も匆々足早やに客席へ這入られての見物は恐れ入る。第三狂言『地上の星』の作者額田六福兄が、自作を見て泣き顔でダメを言はれる、こと程舞臺は熱演だ。

川村花菱夫人、喜多村綠郎夫人の顔が見える。『どうだ』とミノさん中野實君が案じて樣子を見に來てくれる。全く宇頂天で第一日は終る。

二日目が苦の種の各新聞社の招待日だ。一人でも多くの方に見て頂いて、一行でも多く書いて頂きたし、惡く書かれるのは困ると、首の座に直る心地だ。

ずらりと三十數氏が陣取られる。聞けば斯く揃はれたことは第一劇場では珍らしいことだと。伊原青々園、本山荻舟、田村西男、中內蝶二、渥美淸太郎、安部豊、水谷幻花、中山楠雄、井口政治と存じ上げてゐるお歴々だけでも大變だ。どうか好評を賜はれかしと神に祈つた。その効空しからず、いづれもから實に身にあまる過褒を頂いて恐縮した。だが、有難たうございました。これで、家庭劇も一年に二回は上京さして頂けそうです。

こゝまで書いて既に紙數の超過しつゝあることに氣づいた。私はこの筆法でまだ多くを書きたいと思つてゐた。それは

6 とうそんの友情

とうそんとは井上、水谷、梅島と共に歌舞伎座に出濱中の藤村秀夫君のことで、とうそんが大阪にあつて舞臺を共にした石河薫、高田亘、山田隆也の三優と私を日本橋の泉屋に招待してくれた夜のことや、私の爲に十六日に盛大な觀劇會を催してくれたことが書きたい。

7 菊池寛氏のお祝ひの會

十二日の夜、東京會館で菊池寛氏が文藝家協會の初代會長に就任された披露宴會が開かれた。當地は文壇著名の士のみ百數十名列席された。私も出席して諸氏と談笑するの光榮に浴した。

8 舞臺の會

十四日には三信ビルで『舞臺』の春季總會が開かれた。岡本先生始め八十名近い會合で、私は「京阪神地方の報告」と

題して、少しお喋べりをした。

9 演劇博物館

恰度上京された高谷伸君と十吾と三人で早稲田の演劇博物館に河竹繁俊氏を訪ねて、談たま〳〵曾我廼家五郎、十郎論に及んで俄然十吾は昂奮し出した。

10 明治と東劇

菊吉合同の明治座と、左團次に猿之助、幸四郎、仁左衛門、梅玉の東劇とを覗いて、東京でなくては見られないものを見て來た事。

11 青ちやんの追博會

即ち新國劇文藝部員青木齋一郎君が三十三歳で逝去された。その追悼會が芝の增上寺で行はれた。その涙ぐましき參列記と、私と青ちやんの思ひ出のかず〳〵。

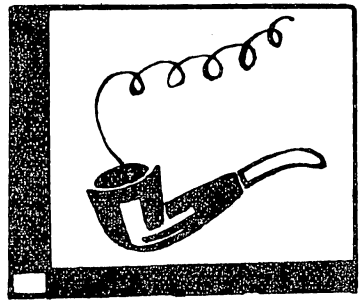
12 旗洗莊と六福邸

旗洗莊主人は川村花菱氏である。六福邸とは門兄額田六福氏の阿佐ケ谷の邸宅である。ともに私が上京したら必ず立寄らせて貰ふ懷かしいお家と主人公だ。此度は早稲田演劇協會と舞臺社の共同主催で觀劇會をリードして下された。

13 我が宿勘彌邸

この感銘錄の最後に、此度の上京中私が宿めて貰つた守田勘彌邸のことが書きたかつた。主人公は東西青年歌舞伎の花形として京都南座と名古屋御園座を打ちつゝあつて不在中、留守居の役は守田家の栗山大膳事田島老人に女中二氏、隣接するは伏見宮御別邸に藤原銀次郎と久原房之助の邸がいづれも庭つゞき、二十數日の滯在中、主人公とは一度も顏を合さず、さてと寢顏を見てのさよならなど、あらすじを書いただけでも長くなつた。委細はいづれも私の膽に特記致しておきます。

——京都南座にて——



試膽會綺談

都築文男

これは御注文の「ぞつとした話」にはならないかも知れないが、僕の腦裡に怪談じみた記憶では一番印象深い。

明治の末期のある夏――大津で興行した折、偶々試膽會を催はさうと提案した事があつた。座員も手を拍つて賛成。

場所は絶好の三井寺、此の寺のお茶所から寺の塀に沿つて淋しい路を數町ゆくと年經た沼池がある沼池の土橋を越すと古色蒼然たる古堂がある。堂の右手が不氣味な畫尙暗い竹藪、左側が坦々として芋畑が續いてゐる。凡そ灯や人家には緣遠い場所。晝は大津聯隊の兵士が組銃をして休息する場所である。

當夜は誂へ向きに蒼白い初秋の月が皎々と冴え渡る。自分は審査員の一人として先づ實地下調べに行つた。

時間は閉演後だから眞夜中近いジメジメした空氣に自分の跫足のみが木霊して誠に怪奇じみ雰圍氣土橋から月光に照らされれ顏を沼の面に寫すと、まるで墓場から甦つた屍のやうで自分乍ら薄氣味悪い。と、前方に古堂が見える、ふと見ると白壁に見えたが、近づいてみると煤けた破れ障子で延び方題の雜草があたり一面夜露に濡れてゐる。哀れぽい虫の音が幽靈の前奏曲のやうに寂しさをそゝる。サツト生ゐるい風が頰を撫でる。古堂を一周すると裏手に椽に上る階段がある。カタ〳〵と大きな音を殘して椽に上ると、突如、

「ウー」低い呻きだ、聲何處からとも無く。

「・・・」思はず寒氣がして、襟かき合せて耳をすました。どうも堂の中らしい。ソツと覗いてみると西國巡禮の老婆が寢てゐる。

安堵と微笑がこみ上つてくる、

「そうだ、こりや好い材料だ」

人北叟笑んで此の堂の上り段の暗闇に荒繩を張つて躓くやうに仕掛ておいた。皆が待つてゐる。お茶所へ歸つてくる、サアこれから獨り獨りの試膽會が始まる。

沿道の不氣味さや、土橋から沼へ顏を寫した時の凄さ、尾鰭をつけて脚色して皆に話をする、最後に「此の堂の障子の一部に隙間が開けてある、そこにノートがある

から各自の氏名を記入して歸る事これが條件だ。――

暫くの後、第一番の某俳優が顏面を蒼白にして歸つてきた。

次に行くものが色々訊れたが啞のやうに駄つて眞蒼になつた儘口を開かない。

やがて二番目の男がおづ〳〵と出發した。この男も顏色變へて途中で引返してきた。

第三番籤が當時大部屋に居た河部五郎だ。彼は有名な臆病者だつたが元氣よく威勢を張つて出かけた。少し藥が利きすぎたかなア、と思つて自分が見え隱れに後を跟けて行つた。追々淋しくなると河部は大聲で歌を唄ひ始めた。

「人は武士、氣慨は高山彦九郎……」櫻のステッキを振つて空元氣だ、古堂の前に來ると益々大聲をはり上げる、堂を巡つて荒々しく階段を登つたが、ステッテンコロン、と見事に荒繩に引つかゝつてぶつ倒れた。

起き上ると同時に、堂の中から例の呻き聲が聞える。

「ウ……ウン」

「ダ、、誰だッ、何者だ……」

櫻のステッキを構えて大喝一聲と云ひたい處だが聲が顫えてゐる。

――堂の中から巡禮婆のヨボ〳〵婆々が出てきて

「明日の朝、早く出立しやうと思つておこもりをさせて貰つて居るのに、何だれあんた達は、騒々しくて眠れやしない」老婆は不平たらたらた愚痴つく事。

河部は呆氣に取られてポカンと衝つ立つてるし、僕は竹藪の中で可笑しくて吹き出した。

やがて老婆に二圓の塞錢料を献じて氣嫌をなほして貰ひ、その夜はそこで語りあかしたが、當日の試膽會の一等賞は後程、堂の中にあるノートを調べてわかつたのだが、一番最初の男だつた。

彼は北海道産の俳優だが曾て女を欺して逃げた事があるので、その女の執念と云ふか當夜の試膽會で古堂に來た時、莊嚴で怪奇じみた深夜の空氣と、物怪に追はれるやうな恐ろしさに長々と氏名の傍に繊悔が記載されてあつた。

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ウキスキー
ブランデー
ベルモット
キユーラソー
ペパーミント
ジン
滋養葡萄酒

元賣發

株式會社 横山商店

大阪市東豐後町三番地

電話東(94)三八五六

編輯後記

★愈々盛夏が近づいて來ました。海に、山にソロ〳〵都會が移動を開始します。しかし愛劇家には、山にあつても海にあつても、舞臺の魅力を忘れ切ることは出來ませぬ。貴方の旅行鞄の中に是非本誌をお忘れなきやうに……。

★前號の本誌もお蔭で好評で京都の賣店では一冊の返本もない賣行きでした。本月も神戸來演の六代目一座を筆頭に、中座の關西若手の一座、京都の家庭劇帝都進出凱旋興行と賑かな關西劇壇の陣容に、屹度本誌の賣行きも好調だらうと存じます。

★家庭劇京都初日の日、東京公演の話材を取るべく十吾君と天外君との樂屋を訪れました。昨年の此の頃はあの恐ろしい水害の爲に南座が水びたりになつた頃です。今年も昨日からの大雨で加茂川の濁水が渦卷いて居ります。一年の歳月は一瞬の樣です。

（京都・大橋孝一郎）

★祭月の道頓堀は、各座各劇團が精彩ある競演である。本月も多忙なため、大橋君の助力でやうやく茲にまとめることが出來た。

★高安先生をはじめ、岡本先生、菱田先生、毎月かゝさず本誌のために御執筆下さることは、編輯者の非常な悦びである。

★東京から家庭劇が歸つて來た。長谷川仲先生をはじめ俳優の方々の土産話も興味ある讀物揃ひだと信じる。

★西田先生の寄稿は手許にあるが、期日に間に合はなかつたので掲載出來なかつた、御諒承願ひます。

★では暑さのみぎりお體を御大切に次號盛夏特輯號でお目見得致します。

（村上　勝）

昭和十一年七月一日發行
月刊 雜誌『道頓堀』第十一年 第百十八號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の儘に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十一年七月一日印刷
昭和十一年七月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥江鎭也
共同編輯 山上貞一
松本泰三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯 京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　實用新案

スキナ御化粧紙

（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年六月三十日印刷（毎月一回）
昭和十一年七月一日發行（一日發行）
「道頓堀」第百十六輯第十一年七月號

「道頓堀」　第百十七輯　第十一年　七月號

一部　金參拾錢

踊る明君

七月中旬封切！

林長二郎主演

井上金太郎監督作品

高田浩吉
小笠原章二郎
志賀靖郎
飯塚敏子
特別出演

北見禮子
坪井哲
新妻四郎
高堂國典
花房みどり

高松錦之助
澤井三郎
山路義人
風間宗六
石原須磨男
石川冷
深見悅子
白河富士子
助演

松竹キネマ夏季超大作オールスター